

委託事業実施内容報告書

平成21年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業

【日本語教室の設置運営】

受託団体名 インターカルト日本語学校

1 事業の趣旨・目的

近年、日本に在留する外国人は増加の一途をたどっており、国内における日本語教育の対象となる外国人は、留学生、研修生などのほかに、定住者や日本人の配偶者などの日常生活を送る上で必要な日本語を学習する者が増加している。平成 20 年度の文化庁「外国人に対する日本語教育の現状について」の調査によると、その教師数において、ボランティア等の数が 16,065 人(51.9%)と最も多くなっており、それら教員の多くは前述の定住者や日本人の配偶者といった地域における日本語学習者への教授担当者であると思われる。

そのような現状の中、東京都台東区に位置する当校は、いわゆる外国人集住地区ではないものの、区の全人口の 7%近くを外国人が占め、特に小中学校等の公教育においての外国人に対する日本語教育は決して十分ではないという現状が事前のインタビュー調査によって明らかになった。

そのような背景の下、「親と子の日本語教室」は、遊びを通じて生活言語能力を高め、親子の日本語会話や学習の手助けをするということを目的として開講をした。

2 運営委員会の開催について

【概要】

開催日時	出席者	議題	会議の概要
2009 年 6 月 5 日 15:00～ 16:30	西原鈴子 石井恵理子 加藤早苗 穂坂晴子 谷口真理 大崎紀子	・文化庁委託事業の意義 ・講座について ・募集方法 ・行政との連携	・自己紹介 ・委託事業の取り組みとは ・講座の目的の確認 ・講座の内容、講師の確認 ・仙田氏の話に基づき、行政とどう協力体制をとっていくか。
2009 年 6 月 22 日 14:00～15: 30	西原鈴子 石井恵理子 加藤早苗 穂坂晴子	・講座の内容 ・募集方法	・親子で参加できる講座の内容 ・募集はどのように行うか。

	谷口真理 大崎紀子		
--	--------------	--	--

3 日本語教室の開催について

- ① 日本語教室の名称 「親と子の日本語教室」
- ② 開催場所 インターカルト日本語学校 教室、ラウンジ
- ③ 学習目標・遊びを通して、生活言語能力を高める。それと同時に家庭の中でも、親と子が日本語を使って会話をしたり、学習を共にしたりと、より日本語に親しみを持てるようその手助けを行う。
・休みのとき、親子で遊べる居場所作り。
- ③ 使用した教材・リソース
 - 「こどもにほんご宝島」春原憲一郎・谷啓子監修 池上摩希子他著 アスク出版
 - 「にほんご宝船 いっしょに作る活動集」春原憲一郎監修 中村律子他共著 アスク
 - 「にほんごドレミ」国際協力事業団
 - 「にほんごドレミ ぶんけいれんしゅうちょう」国際協力事業団
 - 「ひろこさんのたのしいにほんご」屋代瑛子・遠藤宏子著 凡人社
 - 「外国からの子どもたちと共に」井上恵子 本の泉社
 - 「日本語学級」大蔵守久著 凡人社
 - 「子供のための日本語教育」山本紀美子他著 アルク
 - 「小学生の工作&手づくり」日本ヴォーグ社
 - 「役立つ私たちのアイデアー外国人児童生徒支援ボランティア学生の活動報告集ー」愛知教育大学
 - 「話そう！遊ぼう！知り合おう！親子の日本語活動集」地球っ子クラブ2000
 - 「にほんごをまなぼう」文部科学省 ぎょうせい
 - 国旗カード
 - CD
 - DVD
 - 「おりがみ全書」高木智
 - ひらがなカタカナ表
 - 世界地図&日本地図
 - カレンダー
 - 新聞紙
 - クレヨン
 - 紙粘土
 - 折り紙

④ 受講者の募集方法

- ・チラシ作成
- ・インターカルト日本語学校 HP 掲載
- ・台東区教育委員会協力依頼
- ・台東区小学校訪問

受講者の総数 10 人 (延べ人数ではなく、受講した人数を記載すること。)

⑤ 開催時間数(回数) 2 ～ 4 時間 (全 10 回)

⑥ 日本語教室の具体的内容

回	開催日時	時間数	参加人数	国籍・母語(人)	教授者・補助者人数	内容
1	10 月 24 日 9:30～13:00	3.5 時間	7 人 子供 5 大人 2	韓国・韓国語(7 人) 子供 5 大人 2	教授者 3 名	はじめまして～ 名札をつくろう～
2	11 月 14 日 9:00～14:00	4 時間	4 人 子供 4	韓国・韓国語(4 人)	教授者 3 名	お弁当を作ろう
3	11 月 28 日 9:30～13:00	3.5 時間	2 人	韓国・韓国語(2 人)	教授者 3 名	紙粘土で遊ぼう
4	12 月 12 日 9:30～13:00	3.5 時間	8 人 子供 8	韓国・韓国語(7 人) 中国・中国語(1 人)	教授者 3 名	紙粘土に色をつけよう、カレンダーを作ろう
5	12 月 26 日 10:00～13:30	3.5 時間	7 人 子供 7	韓国・韓国語(6 人) 中国・中国語(1 人)	教授者 3 名 補助者 4 名	ホットケーキパーティ
6	1 月 9 日 9:30～13:00	3.5 時間	9 人 子供 9	韓国・韓国語(9 人)	教授者 3 名 補助者 1 名	かるたをつくろう！～お正月の遊び～
7	1 月 23 日 9:30～12:30	2.5 時間	7 人 子供 7	韓国・韓国語(7 人)	教授者 3 名 補助者 1 名	折り紙で動物園
	2 月 13 日 10:00～12:00	2 時間 日本語学校交流会参加	3 人 子供 3	韓国・韓国語(3 人)	補助者 4 名	餃子パーティに参加しよう

8	2月20日 9:00～12:00	3時間	4人 子供4	韓国・韓国語(4人)	教授者4名 補助者1名	国旗と世界地図
9	3月13日 9:00～12:00	3.5時間	6人 子供6	韓国・韓国語(5人) 中国・中国語(1人)	教授者4名 補助者1名	たこ焼きパーティ

⑦ 特徴的な授業風景(2～3回分)

第1回 親子で楽しむ日本語教室

人数	5人	男女比	男:2 女:3
国籍	韓国5名	年齢	5歳～12歳
テーマ	「はじめまして！～名札をつくろう～」		
内 容	自己紹介と名札作り		
目 的	初回ということで、まず自己紹介や名札作りなどの活動を通して子供たちの日本語能力を見る。 次回につながるよう、あまり堅苦しくない雰囲気をつくりこの場に早く慣れてもらいたい。		
実際の様子	①自己紹介 子供たちにひとりずつ名前と学年を言ってもらい自己紹介。子供たちは予想以上に日本語を話すことができ、この段階で発音、聞き取りなどコミュニケーションに支障は見られなかった。 ②名札作り 事前に用意しておいた動物などの形の名札から好きなものを選び、カタカナもしくは漢字を使って自分の名札を作った。子供たちの日本語能力がどれぐらいかわからなかったため、カタカナが書けない場合も想定して50音表なども用意してあったが必要なかった。名前を書いた後は、裏面に色を塗ったりしてもらった。 ③日本の遊び道具で遊ぼう 用意しておいたコマ、だるま落とし、けん玉などを使って遊ぶ。知っているものもあったようだが、皆思い思いに遊んでいた。全体でかるたも行ったが、上の子供たちは反応がとても良かった。この時集中していて良かったのだが、熱中しすぎて子供同士がケンカになる場面があった。この活動の後、ホワイトボードにお絵かきをしながら家から学校までの道程を話してもらったり、イラストカードを使って食べ物の名前を言ってもらうなど、会話によるコミュニケーションを行った。		

反 省	事前に申し込みがあったのが 2 名で、その人数を想定して準備を進めていたが、実際には 5 名の参加者となった。また、想定していた以上に日本語能力があり、現時点でコミュニケーションにはほとんど問題がなかった。結果、日本語を指導するという場面がほとんどなく、会話や遊びを通してのコミュニケーションのみとなってしまった。 保護者(母親)が二人いたのだが、子供たちの活動を教室の隅から見守る形となり、一緒に活動する流れはほとんど作れなかった。 初回ということで子供もスタッフもどれだけ打ち解けて活動ができるかと心配もあったが、遊び道具で遊ぶ時やホワイトボードでお絵かきをしている時などは子供たちの方からスタッフに話しかけてきたりと、思っていたよりはリラックスしたムードになった。その反面、子供たちが自由に動き回りすぎるあまり、多少落ち着きのない感もあった。
-----	---

第2回 親子で楽しむ日本語教室

人数	4人	男女比	女:4
国籍	韓国	年齢	6歳～12歳
テーマ	「 お弁当をつくろう! 」		
内 容	簡単な調理でお弁当を完成させる。		
目 的	日本の一般的なお弁当を作るにあたり、日本の食材や調理器具、調理法を知る。特に、食べ物の名詞や、「切る」「焼く」「つめる」などの動詞を確認しながら動作と会話で示していく。日本人児童が持参する標準的なお弁当をどの程度知っているか確認したい。		
実際の様子	お弁当内容:ミニハンバーグ(冷凍)、たこ・カニウィンナー、玉子焼き(既成品) ちくわ、かまぼこ、ミニトマト、海苔、おにぎり、おにぎり用ふりかけ 用意したもの:まな板(作業用に薄いものを人数分)、エプロン(人数分) ホットプレート(ハンバーグ・ウィンナー用)、お弁当箱 子供用包丁、型器、調理器具全般 前提:女兒4名の韓国人のみということもあり、テーマには積極的に参加。 スタッフ側で下準備をしておき、子供は工作のように触れられる段階から参加。 作業:①準備してあるきゅうりとチーズを更に細く切りちくわに通す。 それぞれ通す作業に集中し、好みと彩りから「もっと細く」という言葉が多くみられた。 ②「たこさんウィンナー」「カニさんウィンナー」をつくる。 今回の大きなポイントであるおかずの下準備。それぞれ型もあるが、		

	包丁を使用し、「足長たこ」や「足切れカニ」などができる。 ③おにぎりをつくる 混ぜご飯にしてあるごはんから、手や型で形をつくる。海苔をハサミで切り、目や鼻で顔を作ったり巻いたりして、たくさんのおにぎりが完成。 ④ホットプレートで焼く ハンバーグを温めると同時に、ウィンナーを焼いていく。たこの足が縮まり開いていく様子を見ながら、どのウィンナーがいいとか悪いとか、おかしいとかを皆で言い合う。いいにおいに誘われてつまみ食いをする
	ことも…。ちくわも焼いてみたり、チーズに海苔を巻いて焼いたりなども。 ⑤詰める 各自、お弁当箱に詰める。玉子焼きとかまぼこをスタッフが切ったところ、自分で工夫し形をつくりながらお弁当を詰めていき完成。
反 省	日本語での会話にはほとんど問題ないこともあり、進行には影響がなかった。しかしながら、作ることに集中しなければならないので、お国(母国:韓国)でのお弁当の様子や内容などを話すことが予想より少なくなってしまった。作業がなくては飽きてしまうこともわかったが、スタッフ側としては、もう少し作業の的をしぼり片手間に作りながら聞き出すこと、発話させることをしたかった。目的の中の、名詞や調理法の動詞などは素直に聞き入れられ、発話もできていたが、欲を言えば日本と母国とのお弁当の違いや、学校や遠足でのご飯の様子などをもっと聞き出したかった。しかし本当は、それらを子供から話させることを望むよりも、親から聞き出すことの方が「親子で楽しむ日本語教室」の目的になるはずで、親への参加を引き続き促していきたい。 

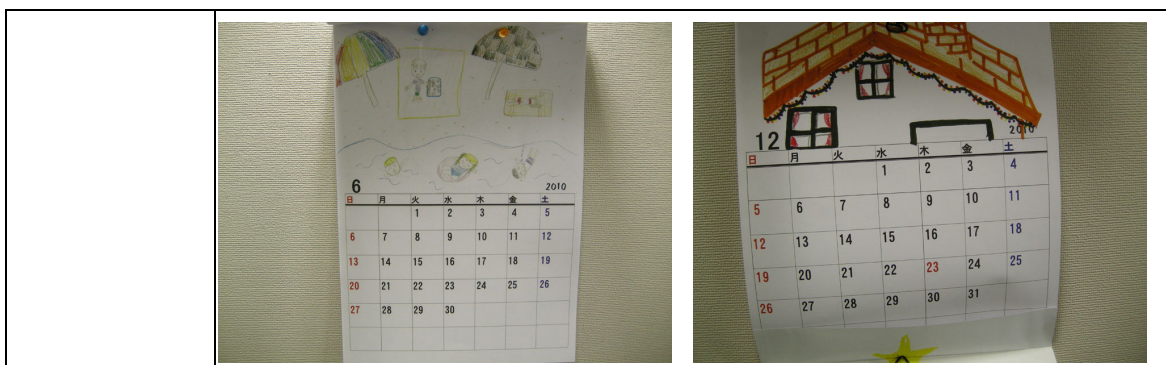
第3回 親子で楽しむ日本語教室

人数	2人	男女比	女:2人
国籍	韓国	年齢	10歳～12歳
テーマ	「紙粘土で遊ぼう」		
内 容	紙粘土を使ってアクセサリーや動物などを作る。		
目 的	実際に製作しながら「丸める」「伸ばす」「広げる」などの表現を身につける。テーマを決めて、それに従って助け合いながら作る。		
実際の様子	まず、絵本の読み聞かせから始めた。(「ライオンのよい いちにち」) その後、今度は子どもに読んでもらった。(「そらめくんとめだかのこ」「かいけつゾロリ」) ① 紙粘土を使って、何を作るか相談。 今回は女子のみの参加ということもあり、アクセサリーを作るということになった。友人や先生にプレゼントしたいとの意向もあった。 ② クッキー型などを使って形づくり。 クッキー型を用いて、星型やハート型に形を抜いたり、自分たちで形づくりをしたりと思い思いの形を作っていた。 ③ クリスマスのオーナメントづくり。 季節柄、クリスマス用のオーナメントも作り出した。スタッフ側が特別に用意していたわけではなく、子どもたちが考えて作り始めた。 今回は通っている小学校の行事の都合で、1時間のみの指導となった。足りない分をスタッフ側で補い、次回までに乾燥させて色付けを行なう。		
反 省	今回は、時間が短かったために予定していた指導を全て行なうことができなかった。 次回からは、あらかじめわかっている範囲で学校行事との兼ね合いも考え、プログラムを構成しなければいけないと思った。 子どもたちも最後まで仕上げたかったようなので、中途半端に終わってしまったことが反省すべき点である。		



第4回 親子で楽しむ日本語教室

人数	8人	男女比	男:3、女:5
国籍	韓国、中国	年齢	5歳～12歳
テーマ	「紙粘土に色をつけよう、カレンダーを作ろう」		
内 容	前回作った紙粘土の作品に色をつける、みんなで1つのカレンダーを作る		
目 的	・色付けをして、紙粘土の作品を仕上げる。 ・来年度用のカレンダーをひとりが一月分を担当し、その月にちなんだ絵を描く。次回までにスタッフが、全員分をまとめて1つのカレンダーにする。		
実際の様子	・絵本の読み聞かせ『和』の行事えほん 春と夏の巻」高野紀子作(あすなろ書房) ・子どもに読んでもらう」 同上 秋と冬の巻」 同上 ① 作品の色づけ 前回参加しなかった子どもたちも交え、作品に色をつけていく。誰がどの作品に色をつけるかがなかなか決まらず、それぞれに話し合って解決していた。思いうような色を混ぜることができずに、手間取っている子どももいた。次回までにスタッフが乾燥させておく。 ② カレンダー作り 月ごとにどんな絵がよいかを考える。小さい子どもは月にかかわらず、好きな絵を描いていたが、上級生になるにつれ、季節ごとの絵を描いていた。 ③ 描いた絵が何月の絵にするのがふさわしいか、みんなで決める。 描き終わった絵をみんなで見て、どの絵を何月にするか考える。自分の誕生月に自分の絵を使いたいという子どももいた。 ④ 日にちを正確に書く。 1日から順番に書く。小さい子どもは、2月が何日までであるのかわからなかったようだ。 ⑤ 出来上がった作品をカレンダーにする。 スタッフが厚紙にカラーコピーをし、次回全員に配る。		
反 省	・前回参加していない子どもが、自分の紙粘土作品がないことに少しとまどいがあったようである。作った立場、色を塗る立場で思い描いている色が違ったようである。 ・カレンダーの絵は、絵本を見ながら描く子どもが何人かいたので、オリジナリティーに欠ける場所があった。自分の思う季節の絵を、描かせることができなかったのが反省すべき点である。		



第5回 親子で楽しむ日本語教室

人数	児童7人	男女比	男:3 女:4
国籍	韓国 6 人 中国 1 人(小 5 男)	年齢	男:幼 1 小 2・5 女:小 1・2・6
テーマ	「 ホットケーキパーティー♪ 」		
内 容	1 日遅れのクリスマスパーティーとして、皆でホットケーキを焼く。		
目 的	誰がきれいに焼けるかな？皆でたくさんホットケーキを焼いてみる。 誰にあげるか、どんな形にするか、飾りはどうするか、どうしたいかをたくさん実践してみる。最後は皆で食べてみて見た目と味と感想を言い合う。		
実際の様子	用意したもの:エプロン(人数分)、ホットプレート(2 個)、ホットケーキのもと、型、飾り用チョコ・ビーズ 前提:今回は粉と水をスタッフが混ぜ、焼く作業のみに集中できるようにした。男児の元気さに対応すべく、今回は日本の中学生に参加してもらった。ホットプレートを 2 個使用したこともあり集まった瞬間から、自然に男女分かれてチームのようになった。 作業:①型を使用するなどしながら焼く。 ②チョコペンや砂糖ビーズなどで飾り付け 女兒チームが次々に焼きながら、飾り付けをしていく中、男児チームはホットプレートに流し込み、ただただ大きいものを作るなどしていた。女兒チームでは時に焼きすぎたり、返すのが難しい様子が見られた。男児チームでは火力が弱いせいもあり、なかなか焼けず、薄くのばしてみるなど工夫している姿が見られた。 焼き終わったら真ん中のテーブルで皆で「いただきます」の予定が、男児チームが待ちきれず食べ始め、それぞれが感想を口にすることとなる。		

反 省

女兒チームは、今食べる用と、家に持って帰る用とをきれいに分け、飾り付けの細かい作業に集中しがちになり会話も少ないものとなった。独自性は男児チームの大胆さがおもしろく、型を使って焼くことよりも、自分で形を工夫する方がいろいろな会話がなされるように思った。

作ることは全員興味を持つが、きれいさにこだわる女兒は作品を見てもらおうと大人に寄ってくるのに対し、創作意欲が満たされた男児たちは感想を言葉にするも自己反省に終わるので、スタッフからの聞き出しが必要に思った。第2回同様、調理については今回も作業項目の多さを感じた。飾り付けなど、細かく集中せざるを得ない作業より、ホットケーキの形を工夫する方が作業が大きく、わかりやすい。各自アルミホイルで型を作るなどして、焼く作業のみに的を絞った方が焼きながらの会話も弾んだかもしれない。



第 6 回 親子で楽しむ日本語教室

人数	9 人	男女比	男:3 女:6
国籍	韓国 9 名	年齢	5 歳～12 歳
テーマ	「かるたをつくろう！～お正月の遊び～」		
内 容	自己紹介と名札作り		
目 的	昨年までの遊び中心のコミュニケーションから、特に必要と思われる「書く・読む」を中心とした活動を織り交ぜていく。 新年の第 1 回ということで、正月にちなんだかるたを作ることを通し、「書く」活動と、子供自身に絵本の読み聞かせをさせることで「読む」活動を行う。		
実際の様子	① かるたで遊ぼう かるたを作る作業をする前に、まず動機付けとしてかるたで遊んだ。以前にもかるたで遊んでおり、子供たちも気に入っている様子だった。今回は人数が多いこともあり上の学年の子供たちと下の学年の子供たち 2 つのグループに分かれて行った。また、前は字札をスタッフが読み上げていたが、今回はグループの中の一人が読み上げるなど自主的な動きもあった。 ② かるたを作ろう かるたで遊んだ後、「あ～を」の親文字のみが書かれた字札を配り、「あ」の文字から始まる文を自分で考えて書くという活動を行った。既存絵札からヒントを得ることが多かったようだが、文を考えるスピードは予想以上に早かった。 この活動中は机に向かった作業だったため、特に年齢が下の子供たちは集中力が続かなかった。 かるた完成後は字札をスタッフが読み上げ、既存の絵札を使ってかるたを行った。やはり自分が作ったものには愛着があるようで、自分の字が読み上げられると勢いよく絵札を取っていた。 ④ 正月の遊びをしよう かるたの後は、お正月にちなんだ遊び(すごろく、福笑い、コマ)などで思い思いに遊んだ。すごろくは最初のかるた同様 2 つのグループに分かれて行ったが、下の年齢のグループはルールもあいまいで、集中力が続かないようだった。 ⑤ 絵本を読もう 準備してあった絵本を何冊か子供たちに見せ、興味があるものを一冊選ばせる。それから他の子供たちを観客に見立て、一人が前に立って読み聞かせを行った。今回は二人にそれぞれ違う話を読んでもらったが、本人はがんばっているものの他の子供たちの反応がいまひとつだった。年齢が一番上の子供でも集中できていないようだった。		

	使用絵本:「となりのせきのますだくん」 武田美穂 「アンパンマンとおばけのもり」 やなせたかし
反 省	かるた作りでは、やはり話すことには問題がなくとも、実際に書いてみると必要のないところで濁点を使ってしまったり、ちょっとした言葉の間違いなども見られた。あまり細かく指摘してせっかくのやる気をなくしては困ると思い注意はほとんどしなかったが、やはり書いている最中などにもう少し気をつけてあげればよかったと思う。 絵本の読み聞かせについては、読み聞かせている本人はまじめに読んでくれていたものの、聞いている側の子供たちが集中できておらず、この活動の難しさを感じた。 

第7回 親子で楽しむ日本語教室

人数	児童7人	男女比	男:3 女:4
国籍	韓国7人	年齢	男:幼2名 小2:1名 女:幼1名 小2・4・6各1名
テーマ	「折り紙で動物園」		
内 容	折り紙で動物をたくさん作り、動物園を完成させる。 それぞれの動物に説明書きを添える。		
目 的	折り紙の本を見ながら好きな動物を折る。難しい折り方に出くわしたとき、絵だけではなく、折り方の説明を読んでみる。 動物の形や手足などの部位、動物園での言葉をたくさん話す。 説明書きを書くために、図鑑を引いて動物を探し説明文を読む。また、それを作成した動物園に書いていく。		
実際の様子	用意したもの: 折り紙、動物園用の模造紙、筆記用具、図鑑 作業:①「折り紙で何が折れる??」		

	「猫が折れる」という児童の声をきっかけに、今日は折り紙で動物園を作ることを宣言。それぞれが好きな動物をつくる。 同じ動物が何匹居てもいいこと、一匹ではかわいそうということ、などを言い、動物の取り合いが起こらなくなる。 ②模造紙を使い、2グループに分かれて動物園を作成。 どの動物を園内のどの部分に置くか相談。最初にスタッフから「ここは池にしよう」など提案しイメージが沸く。 ③ 明書きを加える。 難しい説明書きではなく、「リスは何を食べるの?」「どこに住んでるの?」などの問いかけに答えさせ、書くように促す。 年長の児童には、自ら図鑑を見るなどの行動も出てくる。 それを慕って、年下の児童から、自分の分も図鑑で探したいという雰囲気が出ていた。時間内に完成まで至らず、スタッフ側で完成させることとなった。
反 省	折り紙は楽しいらしく、時間がかかってもいろいろ作りたい雰囲気が徐々にできたが、動物を折るのはなかなか困難で、難しいものや、年齢によってより時間がかかってしまった児童は1体作った時点で既に達成感を抱き、他の動物に取りかかる気分になるまでに時間が必要であった。 折り紙本を読むというより、絵を見ながら折っていくため、実際の読み書きの目的としては、説明書きの部分に集中し、折り紙作業を終えた児童達には「書く」作業まで集中力が持続しなかった。 むしろ、集中していた体を動かしたくなっていた。 説明書きは少しになってしまったが、動物の体や食べ物などについて話したり、自分の言葉で書いたりしたことは、何をどのくらい知っていて、どのくらい書けるかなどの参考になった。

第8回 親子で楽しむ日本語教室

人数	児童4人	男女比	男:1 女:3
国籍	韓国4人	年齢	男:幼1 女:小4・6
テーマ	「国旗と世界地図」		
内 容	ゲームで国名をたくさん知る。カタカナを書く。		
目 的	知ってる国名を教えて！世界地図を見ながら、他にどんな国があるかをみんなで確認する。かるたで聞いて読む。口ぐちに言いながら地図に書き込む。カタカナの国をたくさん読んで、たくさん書く。		
実際の様子	用意したもの:かるた、世界地図、筆記用具、カタカナ 50 音図 ③用に国旗カード(41 枚)とダミーカード(16 枚) 作業:あらかじめ、教室内のいたる所に国旗のカードを貼っておく。 ① かるたで国名を知る。 取札には国旗の絵があることで、色彩の好き嫌いなどいろいろな意見が出る。「きれい・暗い・★星が多い・アフリカの国旗には黒がある」など発見したことを口にする。 ② 暑い国？寒い国？ 冬季オリンピックが開催されていることから、かるたの取札について「この国は寒いかも…」「アフリカは暑い」というふうな意見もあり、正解は関係なく「暑い・普通・寒い」の3種類に分けた。 ③ 世界地図を埋める 「よーい、ドン！」の掛け声で教室内に貼ってある国旗カードを回収！ 誰が何枚探し出したかを競う！ 回収した国旗カードに国名を記入。促音、引く音、ちゃんと書けるか確認！世界地図に貼っていく。		

反 省	国旗の鮮やかさにはとても関心を示し、かるたもカード探しも好奇心が持続して進めることができた。 後半最後の国名を書いて地図を完成させる段階では、「書く」ことに熱中し、地図中のどこにあるかには興味が持てなくなっていた。この部分には、低・中学年での受け止め方と高学年の関心度に大きな差があることから改善が必要と感じた。 今回の内容を通じてとくに感じたことの中に、ほんの少しでも勉強っぽさを感じてしまうと、急に楽しむことから離れてしまいテンションが下がり、冷めてしまう点である。これは、続けて来ているメンバーたちが、いかにこの時間を楽しんでいるかということであり、彼らにとってここには学習支援の要素は期待していないということである。 例えば今回の内容で言えば、国名記入後には好きな国旗をいくつか選び地図中のどこにあるか当てる…、などゲーム要素を十分に取り入れることで単なる学習と違いをつけることが重要であるとスタッフ全員が確信した。「話す・書く」ことへの取り組みは有意義なものになった。 
-----	---

第 9 回 親子で楽しむ日本語教室

人数	6 人	男女比	男:2 女:4
国籍	韓国 5 名 中国 1 名	年齢	5 歳～12 歳
テーマ	「 たこ焼きパーティ 」		
内 容	たこ焼きとホットケーキ作り		
目 的	活動の締めくくりとして、楽しいパーティで思い出を作る。		
実際の様子	① 料理の準備 たこ焼き・ホットケーキのタネを作る、タコを切るなどの作業をそれぞれ分担		

	して行った。ほとんどの作業は子供たち自身が進んでやっていた。 ② たこ焼きを作る まずスタッフが作り方を説明し、あとは子供たち自身が作業を行った。子供たちはたこ焼きを作ったことがないようで、最初は恐る恐るといった様子だったが、真剣な面持ちで鉄板を見守っていた。 特に中国人の男子と韓国人の女子二人が中心となって作っていたが、たこ焼きをひっくり返す時などは協力する姿も見られた。 また、子供たちから進んで、出来上がったたこ焼きを席を外していたスタッフの分ために残してくれていた。 ③ ホットケーキを作る ホットケーキ作りは以前も行ったことがあるが、今回はたこ焼きの鉄板を使ってボール型のホットケーキを作った。こちらは最年長の女子が中心となっていた。焼き加減などにもよく注意し、出来上がったときは満足そうな様子だった。また、出来上がったときには別で作業をしていたたこ焼きのグループにも持って行って食べさせてあげるなど、分かち合おうとする様子が良かった。 ④ 絵本を読もう 準備してあった絵本を何冊か子供たちに見せ、興味があるものを一冊選ばせる。それから他の子供たちを観客に見立て、一人が前に立って読み聞かせを行った。 使用絵本:「こぶとり」 大川悦生 「もりいちばんのおともだち」 ふくざわゆみこ
反 省	今回の内容は事前に告知をしていなかったためか、朝ごはんを食べてから時間が経っていなかったようで、出来上がったたこ焼きやホットケーキはあまりたくさん食べられないようだった。 作業の途中で飽きてしまった韓国人の年少の子供たちが遊びだした際、年長の中国人の子が注意して見てあげるなど、国籍に関わらずコミュニケーションが取れていたのがよかった。また、子供たち同士だけでなく、子供たちの方からスタッフのことも考えた行動を取る事ができていた。



4 事業に対する評価について

① 当初の学習目標の達成状況

- ・対象は「親と子」であったが、実際は子どもの参加しかなかった。子どもにとっては楽しい場所になったようで、口コミで途中参加者も数名あった。
- ・生活言語能力は確実についたように見受けられる。
- ・教科指導までは、取り組むことができなかった。

② 学習者の習得状況

- ・大半が生活言語については問題がなかったが、細かい点での間違いが見られ、その都度訂正した。
- ・書くことには問題があったので、プログラムの中に取り入れるようにした。ゲームや遊びの中に取り入れたので、嫌がったり恥ずかしがったりすることなく、進んで書いていた。
- ・今まで知らなかった日本独特の食習慣や生活習慣を、自分たちが体験することによって習得できた。

③ 日本語教室設置運営の効果、成果

- ・ほとんどが韓国人の子どもたちだったために、わからないことはお互いに韓国語で教えあうなどして日本の学校の中とは違った、日本語の理解ができたようである。
- ・日本の昔からある遊びなどを取り入れたことによって、日本に対する理解や愛着が深まったように感じられた。
- ・学校の中では友だち同士のコミュニケーションだけで済んでしまうが、日本語教室では日本人の大人に対してのコミュニケーションを取らなければならず、その場合の言葉遣いなどを指導することができた。
- ・特に教科指導を行わなかったために、自由にのびのびと日本語を使う場にすることができた。

④ 地域の関係者との連携による効果、成果 等

台東区教育委員会（情報の提供、学校への通達）

台東区立平成小学校（情報の提供と児童参加の依頼）

- ・平成小学校の教師が日本語指導者養成講座に参加してくださったことで、より積極的に

学校に在籍する外国人児童に日本語教室に参加するように働きかけてくれたり、当校からの親用の手紙の受付をしてくれたり、共に協力しあえる体制が築けたことは大きい。

⑤ 改める善点, 今後の課題について(具体的に記述する。)

a.現状

2009年1月1日現在、台東区の人口165,205人のうち、外国人登録者数は11,817人で、区の人口の7.2%を占め、14人に1人が外国人という状況になっている。区によると、言語、文化、宗教、生活習慣などの違いからくる誤解や偏見などにより、外国人の人権にかかわる問題が指摘されているという。その中で、外国人に対する取り組みは、国際交流事業の一環としての行事が定期的に行われているようであるが、日本語教育に関してはボランティアベースでの講座開催が主であり、特に年少者、学校教育内での外国人児童・生徒に対しては不十分であるということが、区の教育委員会へのインタビューでも聞かれた。

b・今後の課題

子供たちだけではなく、日本語を話せない保護者がいつでも日本語を学べる場、交流できる居場所を作る必要がある。

今回は生活言語を不自由なく使いこなせる外国人児童が多かったが、現実には日本語習得に困難をきたしている児童も多くいると思うので、学校から情報を得るために協力体制を作る必要があるが、まずは学校から信頼を得るために、委託事業などを通して地域で外国人児童のために活動をしている実績を示していく必要がある。

台東区の教育委員会には外国人児童が日本の学校で楽しく学校生活が送れるように、時間をかけた日本語指導が必要であることに気付かせなければならない。

日本語学校は日本語を教えるプロのいる学校なので、協力体制を作ることで日本語習得に困難をきたしている児童、保護者の問題を少しでも緩和できると思う。

c.今後の活動予定, 展望

- ・生活言語についてはほとんど問題がないので、今後は教科指導に重点を置いたプログラムを実施したい。

- ・親の参加がなかったので、親を対象とした内容を考えたい。子どもと一緒によいのか、別々がよいのか、親だけがよいのかなどを再考して、取り組んでいきたい。

- ・近隣の人や子どもとの交流の時間をとることができなかったので、今後はもう少し地域と密着した内容のものを取り入れたい。

- ・1回ごとの内容が1つ1つ独立したものとなってしまう、全体を通しての流れがなかった。もっと大きな中心となる目標をしっかりと決め、それにそった内容を実施していくようにしたい。

- ・国籍が偏ってしまったので、色々な国籍を持つ親や子どもたちが集まることのできるような場を作るようにしたい。

- ・教育委員会や学校、コミュニティなどともっと連携して実施できるようなシステムや内容づくりに取り組んでいきたい。
- ・今回は兄弟・姉妹の参加が多かったので、ひとりでも参加することができるような雰囲気のある場にしたい。
- ・このプログラムを日本語学校でする意義が出せなかった。今後は、日本語学校ならではの特色を出すことのできるプログラム作りに取り組みたい。

※写真は、肖像権等に配慮し、差し支えないものを添付すること。